

川柳マガジンファンクラブ 十二月句会 句評会 松橋帆波

今回の句評会では次の21句が組上に乗せられた。(句評時には作者名は伏せてあります)

1. 落丁もあるシナリオの舟を漕ぎ 利江
2. 学校を励ます月が真丸い 太郎
3. 饒舌の合間の本音見逃さず ゆう子
4. 太っても痩せても同じ靴を履き 帆波
5. 心中で万歳叫ぶ気のへたり 倫也
6. 3×3 両手エプロンで引率 団扇
7. 本能は人を醜い顔にする 三十六
8. 頑張れに付け足してやるモノが無い 淳隆
9. 限りある命あなたも私も 千枝子
10. 母親がクルリ女の顔になる 流子
11. 無伴奏の温もりを聴くわらべ唄 朔太郎
12. 渋い茶が出て頃合を知らされる トラ夫
13. 杖頼る身を杖として老夫婦 博重
14. 鬼嫁になりそう声も背もデカイ 衛
15. 蔓延官製談合常態化 宣子
16. 沈黙の臓器と地球狂い出す 和興
17. 空きベンチ座れば鳩が寄って来る くんじ
18. 過労死もニートもいます感謝の日 寿志子
19. バカヤロー殺す別れる虹が出た 青蛙
20. 沈黙が意味を持たない真昼間 耕平
21. 出る杭は打たれ凹めば図に乗られ 一泉

まず1から11までの作品に付いて参加者全員に感想と意見を述べてもらった。

評価が集まったのは2、4、10、11。

2はイジメ問題、未履修問題等に揺れる学校を「月が温かく見守っている」という視点と「月だけが励ましている寂しさ、哀しさ」という見方の二つに大きく分かれた。「学校」を「先生」の喩と捉え、夜遅くまで様々な問題に取り組んでいる姿へのエールという見方もあった。

4は太る痩せるを体型としてとらえるか、生活環境、経済な事まで含めた見方をするかで、「同じ靴」が「一足の靴」か「靴のサイズ」まで広がるのかが、読み手に左右される点があり、「一足の靴」ならば過去の作品に似てしまうのではという意見があった。

10は「クルリ」のカタカナ表記を評価する声があった。子供への虐待が問題化している中、「母と女」の間をさまよう感情を表現しようとしたものではないかという意見の反

面、その点への具体性が欲しいといった意見も出た。

11は「無伴奏」と「わらべ唄」が重なるとの意見も出たが、「温もり」を主体に読むことでアカペラであったり、子供たちの唄声、母の唄声など、広がりが出るのではないかと。「無伴奏のわらべ唄」から感じさせられる「温もり」が作者の思いであり、読者との共有がそこにある、という読み方に納得された方が多かったのではないかと。

次に、分からなかったという作品は、5、6。

5には状況が不明という意見が出た。「心中で」が説明になってしまい、「心の中で叫ぶ」という状況が見えにくかったのではないかと。万歳は愛国心や日の丸の喩であり、「何故ここで万歳という不思議な場面が増えているのか」という意味ではないかという意見があり、理解が進む。

6は、まずどのように披講するのかが不明。「エプロン」「引率」で保育士の事だろうとは理解がされたが、「3×3」が不明。

参加者の意見が出揃ったところで各作品について作者からの説明をいただく。7について参加者から「母性本能」「知性」「性善説」などの意見が出たが、作者の解説は「三大欲求」を想定し、そこから「人間」を描くというものである。6について作者より「3×3」は園児を表すとの説明がある。それぞれの手で「3人×3列」の子供たちを引率している保育士の大変さの表現である。

次に、12から21までの作品について、意見を求める。

評価が集まったのは12、17、18。

12は「具体的に言わないでその状況を匂わせている点」に評価が集まる。「渋い」を「ぬるい」として比較してみたいという意見も出た。

17は作品から受ける風景に哀愁と余韻を感じる。という意見が多く、読者自身がその状況に置かれたときの感情を楽しんだことが感じられる。18は現在の労働環境と「勤労感謝の日」との対比に評価が集まった。

あと15が、全て漢字で構成されている点が評価された。

評価の分かれたのは14、16、19。

14は、舅姑が嫁を「鬼嫁」と見ているのかそうでないのかの視点の違いがそのまま評価に現れた。16は「沈黙の臓器」と「地球」なのか「沈黙の臓器」＝「地球」なのかという読み方の差によるものであった。19は作品の上の部分と下五との落差に対して「何かがあるのではないかと」という視点と「分からない」という意見が出る。

前半と同じように、意見が出尽くした時点で作者からのコメントを求める。17では、「鳩が寄ってきた」事に対する作者の考察、つまり「このベンチに座る誰かが、いつも鳩に餌をやっているのではないかと」という気付きから生まれたとの説明があった。

19は夫婦喧嘩の状況下での言葉のやり取りであることが説明された。過激な表現ではあるが言い切った後の感情が「虹が出た」という下五につながったとのこと。

以上、簡単なレポートになったが、気付いた事は、意外性のある言葉を用いる場合の効果

について、言葉を「比喩」として受け取るか「修飾」として捕らえるかで句意の理解に違いが生まれる事と、「具体性」を有する事で思いが読み取られる場合と、「具体性」がないことでより状況の共有性が高まるという場合があるという点である。表現としてどちらが有効かということではなく、どういった思いを伝えるかの手法の差として、相反する形態が共存しているということである。当たり前のことではあるが、作品を作る場合、また鑑賞する場合に一方向からの視点だけでは本質を見誤る可能性があるということを改めて認識させられたのは大きな収穫である。

ブログにUPした川柳相撲の原稿に少しだけ手を加えたものです。 帆波

「川柳相撲」

川柳マガジンファンクラブ十二月場所 松橋帆波

川柳相撲は余興として昔はよく行われていたようですが、最近はとんと聞かなくなりしました。

私は何度か経験しておりまして、自作の小道具も幾つか所持していましたので、団扇氏と私で呼び出しと行事を交互に務める形で行いました。

まず、くじを引いていただき「偶数と奇数」で出席者を二つのグループに分けます。

東と西ですね。

次に課題を出します。「丸い」で3句。

4分で作っていただきました。

(3分のつもりがタイマーの操作を間違えて4分になってしまいました)

出来上がったら、偶数奇数の番号で対戦の組み合わせを行い、前に出てきていただいて作った3句の中から1句をお互いに読み上げてもらいます。

それを行事がもう一度読み上げ、「東」「西」どちらかに軍配を上げるのです。

このときの判定に不服があれば、出席者の方は「物言い」をすることが出来ます。

行司はそのときどうして選んだかを説明できなければなりません。

物言いの方が行事を納得させられれば、「行事差し違え」となります。

全員が1句目を披露し終えたら、組み合わせを変えて後二回繰返します。

(このときに同じ番号のクジがあったため、同じ組み合わせがおきてしまい、バタバタしてしまいました)

全員が3回の対戦を終えたら、勝ち負けの数を確認いたします。

まず3勝の人。そして2勝1敗の人。

この人たちで「横綱」を決めるトーナメント行います。

(人数によってトーナメント表が難しいのですが、3勝の方をシードにしたり工夫をします)

トーナメント第一回戦は即吟です。

それぞれの課題は「料理一切」「動物一切」「スポーツ一切」「飲み物一切」にいたしました。

即吟ですから、出て来てもらって句箋をお渡しし課題を発表、

「はっけよいのこった！」

で作句に取り掛かっていただきます。

制限時間は90秒。

ですから一回戦はそれぞれに課題が違います。

「～一切」という課題は、ベテランの方とそうでない方が同じように苦勞していただくために、普段の競吟ではあまり使われない出題方法を選んだというのが理由です。

次の二回戦、三回戦は「学校」「悩む」という課題を先に出し、作句いただいてから戦っていただきました。課題の出し方を微妙に変えるのはリズムに変化を持たせるためです。

そして決勝戦。

決勝は杉山太郎氏と尾藤一泉氏。

まず口上をいたしまして（このとき角材を打ち鳴らします）

両者を土俵（前の席）へ呼び（男性はお名前の後ろに山か岳、女性は海をつけると雰囲気が出ます）

呼び出し役が懸賞の幕を持って皆さんの前を回ります。

そして出題。

課題は「強い」です。

行事は私。

制限時間は90 秒。

「はっけよいのこった！」

日の丸が場所を貸してる星条旗 太郎

エリートのおわずかにひとり勝てぬ妻 尾藤一泉

判定は西

日の丸が場所を貸してる星条旗 杉山太郎

をいただきました。

短い時間で（もちろん推敲は出来ません）伝えたいものを何処まで表現できたかが基準になりました。

みごと横綱になられた杉山太郎さんには懸賞(実は空っぽの熨斗袋と官製ハガキが五枚)が進呈されました。

そしていよいよ土俵入りです。

カレンダーの表紙で作った化粧回しと、黒いビニール袋で作った大銀杏をかぶっていただき、準優勝の尾藤一泉さんにはおもちゃの刀を持っていただき、太刀持ちをやっていただきます。

皆さんの

「よいしょ！」

の声援の中「四股」を踏んでいただきました。

一番沢山句を作って、勝ち抜いたはずなのに、ちょっと恥ずかしい事になるんですね。

これが余興の面白いところです。

全部終わったときは5時。

外は暗くなっていました。

さて、この後世話人と有志で反省会を行ったのですが、その時に話題になったのが一回戦「丸い」で発表された作品

丸い物すぐさわるクセ男達 井出ゆう子

でした。

あの短い時間で、よくぞここまで着想と皆さん感心されていました。

読者の中に入ってから句がどんどん成熟していくといますか、句想が広がっていきます。

いかに作句に着想が大切かを改めて感じさせていただきました。